

関西大学大学院外国語教育学会 NEWS

The Society of Kansai University Graduate School of Foreign Language Education and Research

発行日：2009/8 Vol.3

発行者：外教学会広報通信委員会

この号の内容

p.1 旧会長ご挨拶

p.1 新会長ご挨拶

p.2 研究会報告

パネルディスカッション

分科会

p.3 修了生からの声

p.4 総会報告

p.4 お知らせ

旧会長ご挨拶

みなさま、突然ですが「ビッグ・エス インターナショナル」という非営利株式会社をご存知ですか？2009年5月、大阪と友好協定都市ドイツ・ハンブルク間での「日本語スピーチコンテスト・作文コンテスト」が、約110年の歴史を持つハンブルク支庁舎の豪華な「皇帝の間」で、両親共に日本語非母語話者・日本滞在1年以内の人を対象に開催され、予選を通過した10代後半～20歳代前半の高校生・大学生9人の中で競われました。同時に開催された作文コンテスト「青年の主張・私の人生設計」では、ドイツの高校生に混じり吹田市の中学生複数名も受賞しました。何れも今年が第1回。ウェブ上で紹介されていますので、既にご覧の方もいるかもしれません。

若い人々の世界へ向けられる関心は、ICTの時代大きく広がっています。英語を第1外国語として学びながら、他の言語や文化も学ぶ、またそのような異文化・異言語への関心を育てようとする企業もあるなか、学校教育においても、英語と他の言語が垣根を越えお互いに関心を持ち協力することの重要性は、今後一層高まることと思われまふ。

複数言語の協力で成り立つ「関西大学大学院外国語教育学会」の会長を務めさせて頂いたことを光栄に思ひます。学会の基礎段階から次のステップアップのための会則改訂など、多くの複雑な実務を担われ見事にリーダーシップを発揮された田尻幹事長、そして、それぞれの立場で精力的に学会運営にあられた役員の皆様、心よりお礼を申し上げます。

新会長、八島智子先生のもとで、学会が一層の発展を遂げることをお祈りしています。

(杉谷 眞佐子)

新会長ご挨拶

このたび杉谷眞佐子先生の後任として、外教学会の会長をお引き受けすることになりました。どうかよろしくお願ひいたします。

齋藤栄二先生を初代会長として誕生しましたこの学会も、年を重ね伝統を築きつつありますね。本研究科で学んだ人と現在学んでいる人たちが協力して学会を運営し、研究の発表と対話の場を作っていくことは、知の創造と継承にとって極めて重要です。元より学生間の教え合い、助け合いが、われらの研究科の誇るべき特徴のひとつですが、様々な言語を学ぶ仲間が寄り合う良さを活かして、益々活発なダイアログを起こしてください。人間関係のしがらみにとらわれず、純粋で自由な意見交換ができるこの学会の良き「文化」を継承していきましょう。

(八島 智子)

研究会報告

2009年6月20日(土)午後1時から開催

参加者は合計36名(学会員34名、非学会員2名)

第4回研究会は、「修了生と在学生の縦の糸を繋ぎ」、「学会員の研究・実践に役立つ情報を提供する」という本学会の2つの趣旨を形にするために企画・運営いたしました。5段階評価によるアンケートの結果、全体的に満足した→4.71、第1部(パネルディスカッション)は参考になった→4.78、第2部(分科会)は参考になった→4.83との高評価をいただきました。また、今後取り上げて欲しいテーマとして、「メディア利用法の紹介」や、「統計のワークショップ」などが挙げられました。研究大会委員会では、これからも会員のみならずのニーズにおこたえしながら、質の高い情報と学会員交流の場を提供していく所存です。ご提案やご希望は、研究大会委員会[kenkyu@kuf1er-s.jp]まで。

(研究大会委員会)

1. パネルディスカッション『外教修了後の実践』

森元 靖さん [04M 修了(英語)/ 関西大学北陽高等学校]

伊藤万紀子さん[07M 修了(英語)/ 大阪府立柏原東高等学校]

阿部慎太郎さん[06M 修了(中国語)/ 近畿大学・大阪府立かわち野高等学校(非)]

外教を修了された3名の発表者から、「大学院入学の理由」「研究の取り組み」「教育現場での実践」についてお話いただきました。

森元靖さんは、大学院での経験を「英語による知的な格闘体験」と表現され、「より良い英語教育」と「理論と実践の融合」を実現するために「教育への情熱」が大切なことを教わったと発表されました。

伊藤万紀子さんは、大学院で新しい視点を得られたこと、研究には「気力・体力・財力」が必要で、「学ぶことに終わりはない」という気づきを語られました。また、作成・配布を28年間続けられ、1164号を数える英語通信 *ENGLISH FOR WHAT?* を見せていただきました。

阿部慎太郎さんは中等教育における中国語教師の需要が低いことや、中国語の教育法が確立していない現状を報告され、「外教から中国語教育に新しい風を！」をスローガンに、「中国語・韓国朝鮮語学習のめやすプロジェクト」への参加や、『中国小知識』の作成をされている近況を報告されました。

大学院での研究は想像以上に大変であったが、先生方や他の院生との出会い・かかわりが支えとなったこと、仕事と研究との両立には、周囲の人々とのコミュニケーションが大切であることを、発表者の皆さんが強調されていました。

(森山 美雪)

2. 分科会

「修士論文・課題研究について」

講師:佐藤浩子さん[08M 修了(英語・修士論文)]

佐藤さんから修士論文の書き方や、日頃から気をつけられていることなど、とても役立つ情報をお話していただきました。特に、限られた時間の中でいかに良いものを書くかということは今後忘れずに心に留めておかないといけないと感じました。お仕事をされながらの執筆は、ただの学生の身の私からすると大変なものだと改めて思いましたが、逆に、時間のたっぷりある学生はそれ以上のことをしなければならないのだと非常に良い刺激になったと思います。時間があるとかえって怠ってしまうのは事実ですので、静先生が実際にされていたという、「週に論文を2本読む」というようなアドバイスを参考に、日々自分のできることを決め、限られた3年という時間を有効に使っていきたいと思います。

(出口 雅姫子)

講師：藤川穰輔さん[08M 修了(ドイツ語・課題研究)]

ドイツ語の課題研究に取り組まれた藤川さんのお話を聞かせていただきました。彼は初めてドイツ語を学ぶ人のための学習書を作成しておられました。その学習書は、従来の文法中心のものではなく、初心者が興味をもって学び易いようにと文化や実生活という観点を重視したものでした。

彼は前期課程の3年間で作成した苦労話を中心に、課題研究に取り組んでいる、あるいは取り組もうとしている我々に色々とアドバイスをしてくださいました。その中で、課題研究を料理にたとえ、食材は課題、調理道具は理論、調理方法は研究手順であると話されていたのが印象的で、課題研究がどのようなものかということがよく理解できました。また彼の最後の1年間の研究・課題作成過程はとても参考になるとともに、色々と考えさせられました。ゼミの先生のアドバイスで修正や変更をしなければならないことも多々あるとのことや最終段階でネイティブチェックを受けなければならないことなどについても話していただきました。それを聞き、早くから課題研究に取り組み、先生との話し合いをも十分にもたなければならないということもよく分かりました。課題研究に取り組まなければならない者にとって、とても参考になるものでした。(奥西 嘉一)

「博士論文について」**講師：薮越知子さん[08 Ph.D.取得・英語]**

「皆さんも絶対に大丈夫ですから。」経験者からのこのようなお言葉は、その道の途中でさまよっている者にとって、大変に心強いものでした。講演の中では、ゴールに辿り着くための、いくつもの道標を示してくださいました。例えば、「博士論文作成までのタイムライン」を別途用意してくださいました(その心遣いに嬉しくも感じました)。この時間を通して、聴衆の誰もが自分の位置を再確認できたのではないかと思います。皆が何らかの「秘訣」を持ち帰り、再度出発する決意を胸にした講演となったことでしょうか。因みに、私が得たゴールへの秘訣は「計画性」と「持続性」です。

(中平 里実)

修了生からの声**「大学院での学びとその後～学ぶことに終わりはない～」**

思えば、英語教師となり、長年実践してきた自身をじっくり振り返るゆとりもなかった毎日。「もう一度、大学院で学んで、ライフワークの英語通信の研鑽もしたい」と考え、怖いもの知らずの私は、大学院生活に飛び込みました。が、現実は一筋縄ではなく、わからない事だらけ。まさに学習不安に陥った生徒となりました。毎回の予習・発表準備・多数のレポート作成等、本当に必死の毎日でした。特に春学期は、生活リズムの激変から体調を崩し、フラフラ。それを何とか乗り切れたのは、1年という短期決戦であった事と多くの先生方や院生仲間の支えがあったからです。20単位を修得し余裕が出てきた秋学期には、学んできた事の関連性が少しずつ見えてきました。研究会にも出席し、積極的に学べるようになっていきました。最終テストの準備も大変でしたが、徐々に各教科の関連性が見えてきて「学ぶとはこういうことなんだ!」と再認識しました。教師としての毎日とは違う世界を体験、自分を見つめ直し、新しいものの見方にも気づかされました。結論は、「学ぶことに終わりはない!」です。

昨春、現場に復帰して懐かしく嬉しい気持ちと同時に修了後が本当の勉強の始まりだと気づきました。「英語が少しわかってきた!」と生徒が思えるよう、大学院で学んだ事を思い出しながら、「体で覚える英文法」や「線付け英文法」を取り入れながら悪戦苦闘しています。又、現在、外教の関係者と初めての共同研究に取り組んでいます。大変ではありますが、それを通じて英語を教える楽しさを再発見しています。今回、パネルディスカッションに参加させていただき、自己を見つめ直す機会になりました。振り返ってみて改めて、外教で学んで本当によかったと感じています。大学院での学びは確実に私の教員生活に根付いています。これからも、その繋がりを大切に、定年までのあと7年余り、一歩ずつ歩んでいきたいと思っております。

(伊藤 万紀子[2008年現職教員一年制修了/大阪府立柏原東高校])

総会報告

2008年度の研究会終了後、総会が行われました。会員総数 227名のうち、出席者数 132名（委任状提出者含）にて総会成立となり、議案書に記載事項は全て承認され、滞りなく終了いたしました。2008年度をもって会長の杉谷眞佐子先生がご退任されることとなり、総会閉会式では、学会への激励のお言葉を頂きました。杉谷眞佐子先生のお言葉にはいつも温かいものを感じ、この見えない「何か」がこの学会を支えているような気がします。これまでの3年間、学会運営の基礎固めの時期：第一ステージにご尽力を賜り、改めまして心より感謝申し上げます。2009年度より、八島智子先生に会長としてご就任頂き、大変心強く思います。学会運営の第二ステージに向かって、微力ながらも皆様のお役に立ち、それでいてホッとできるような学会創りをこれからも続けられるとよいなと思ひながら、総会終了後夕暮れの日差しが入る部屋を後にしました。2008年度の行事が無事に終了し、2009年度の新たなスタートを迎えることができましたのも、ひとえに会員の皆様のご支援、そしてご協力のお陰です。本当にありがとうございました。（田尻 利恵子）

お知らせ 現役院生の皆様へ

2009年6月21日より、学会Webサイト[<http://kufler-s.jp/>]よりオンライン入会登録が可能になりました。**現役院生の皆様で、ご入会をご希望される方は入会登録が必要**になります。なお、2009年4月にご入学された皆様は、学会メンバーリストには未登録となっております。学会Webサイトより入会手続きをお済ませ頂ければ、**最新の本学会情報その他が、随時配信**されます。ぜひこの機会にご入会の程ご一考頂き、お1人でも多くの現役院生の皆様のご入会登録を心よりお待ちしております。「知」の追究、そして「和」の追求を一緒に始めませんか。

「知」の追究、そして「和」の追求



関西大学大学院外国語教育学会 HPにて
入会登録受付中

The Society of Kansai University Graduate School
of
Foreign Language Education and Research
<http://kufler-s.jp/>

会費・支払方法

- 会費：1000円（現役院生）、3000円（先生方、修了生）
- 会費お支払方法
- ①指定口座にご入金ください。
- 振込先：郵貯銀行 [口座番号]00970-3-299370
- 口座名称：関西大学大学院外国語教育学会
- ※当学会の会計年度は6月1日～翌年5月31日となっております。
- ②研究会、研究会、総会などの受付にてお支払できます。

会員特典

- 本学会主催の研究大会、研究会の参加費が無料となります。
- 本学会主催の研究大会で研究発表、実践報告をすることができます。
- 本会ニュースレター（年2回発行予定）が送付されます。
- 本学会 ML、HP を通じて、本学会の情報、他学会の情報、就職情報等を受信できます。

問い合わせ先

- 本学会 Web[<http://kufler-s.jp/>] トップページ：メニュー（左サイド）「お問い合わせ」フォームよりご連絡下さい。

【編集後記】

残暑お見舞い申し上げます。今年は、新型インフルエンザによる休校措置による影響で、例年よりも短い夏休みを迎えております。編集部では、Newsletter のさらなる向上に向けて、皆様からのご感想、ご要望をぜひとも聞かせ頂けたらと思っております。どんな些細なことでも結構ですので、こちらのアドレス[mail@kufler-s.jp]まで皆様のお声をお聞かせ下さい。最後になりましたが、Newsletter 発行に伴い御協力を頂きました会員の皆様のお陰で、無事に vol.03 を発行することができました。お忙しい中、ご寄稿頂き誠にありがとうございました。では、vol.04 でお会いしましょう。（編集担当：船越 貴美、小南 智恵）